

沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断裂・散在
——宮古地方と八重山地方を比較して——

松田良孝*

Memories Regarding Taiwanese Immigrants in Okinawa:
A Comparison between Miyako and Yaeyama

MATSUDA Yoshitaka*

Abstract

Taiwanese immigrants moved to Miyako and Yaeyama districts of Okinawa during the Japanese colonial period. Few studies have been done to investigate the immigration from Taiwan to Miyako. The author's research reveals that almost all the immigrants to Miyako were merchants who engaged in the rice business. Many people conducted business in Miyako, but Taiwanese immigrants were just a small part of them. Therefore, their existences were hardly remembered by local people. On the other hand, the immigrants to Yaeyama established a pineapple industry there, it is the only one in Yaeyama. Because of these different circumstances, the Taiwanese in Miyako are very different from those in Yaeyama, therefore more difficult to be remembered by local people.

キーワード：台湾，宮古，八重山，沖縄，植民地主義，移民

Keywords: Taiwan, Miyako, Yaeyama, Okinawa, colonialism, migration

植民地だったころの台湾から沖縄県宮古地方に渡ってきた人々の足跡を筆者が本格的に訪ね歩くようになったのは2013年からのことである。そのときすでに終戦から68年がたっていたわけだから取材が難航することは覚悟のうえであったが、その年の11月に台北へインタビューに行った時にはいい意味で予想を裏切られた。

筆者はこの時、戦前の宮古で撮影した一葉のモノクロ写真を見せられた。そこには三つ揃いの背広を着た3人の男が写っており、1人は松とおぼしき木の枝分かれしたところに腰か

* フリージャーナリスト：free-lance journalist / songtian@my.email.ne.jp

けて膝を組み、残りの2人はその両脇に立っている。裸足と着物が当たり前だった時代にあつて、写真の主人公たちはみな足に革靴といういでたちである。かれらがアッパークラスに属していることは疑いようがなく、やはりそうだったのかと得心がいったものである。というのも、3人のうちの1人（本稿ではT-1-1とする）の名前は、1939年に沖縄の新聞『琉球新報』に掲載された、企業と米穀卸商業組合の設立登記公告のなかに見られることがすでに分かっていたからである。

宮古といえば、日本の台湾統治につながるきっかけとなった1871-1874年の牡丹社事件¹⁾と密接なかわりがあり、その記念碑「愛と和平」が宮古島市立下地中学校にある〔宮古島市立下地中学校 2008: 182-183〕。下地中学校は宮古と台湾を結ぶ重要な接点となっているのだが、下地中学校が実施する台湾に関連した取り組みのなかで植民地期の台湾から宮古に渡った台湾人の存在が言及されることはない。

これはどうしたことだろうか。

この疑問を解き明かすため、筆者はインタビュー調査を行うとともに、ひとつの「モノ」に着目してみた。T-1-1がかかわっていた「米」である。植民地期の台湾から宮古に向けた移出米の動向を探ってみると、宮古地方は、米の供給元として植民地期の台湾に依存するようになるに連れて、植民地台湾からやってくる人々に生存空間を提供するようになったのではないかと推定することができた。T-1-1 その人こそが、米の売買をひとつの動機として植民地期の台湾から宮古にやってきた人物なのではないか。

T-1-1が戦前、宮古島で開いた雑貨店は、戦後になって弟のT-1-4に引き継がれ、その商いの様子は宮古地方を構成する離島のひとつである来間島の高齢者の間で記憶されてはいる。宮古地方全体では共有されず、私的な領域にとどまった記憶としてである。それゆえに、下地中学校の活動や記録では植民地期の台湾から宮古に渡った人々に言及されることはないといえるだろう。

以上の点をより鮮明に描き出すため、本稿では宮古と隣接する八重山地方との比較を試みた。

筆者が沖縄に住む台湾系の人たちに関心を持つようになったのは、かつて所属していた沖縄県石垣島の新聞社²⁾で、取材の一環でその存在を知ったのがきっかけである。石垣島は八重山の主島としての役割を果たす場所であり、筆者はこの地の利を生かし、2002年ごろからは八重山地方に住む台湾系の人たちを集中的に訪ね、話を聞くようになった。八重山地方では、

1) 大浜 [2006: 79] は牡丹社事件について次のように説明している。すなわち、1871年、宮古島の船が台湾の南東海岸に漂着し、乗っていた69人のうち、54人が殺害された。明治政府は1874年、台湾へ派兵した。明治政府はこの「台湾出兵」に抗議する清国との間で交渉を行い、琉球が日本に帰属することを清国に認めさせ、これはいわゆる「琉球処分」の契機となった。

2) 八重山毎日新聞。2016年6月末付で退職した。

パイナップルや水牛など植民地台湾から台湾人が持ち込んだ農作物や役畜が現在の農業や観光業と結びついており [国永ら編 2012], 2012年8月には台湾系ではない地元の人たちの発案で台湾農業者入植顕彰碑を建立するに至る [台湾農業者入植顕彰碑建立期成会 2012] など、八重山と台湾の関係を植民地期から現在まで連続したものとして位置づける考え方が定着している。

八重山地方の農業粗生産額は2006年に121億4000万円で、この大半を占めるサトウキビと肉用牛を除いた29億3000万円のうち、パインは最多の5億3000万円(18.1%)を占め [沖縄県八重山事務所 2015: 27], パインに対する産業上の位置づけは明瞭である。だから、植民地期に八重山にやってきた台湾出身者には「パインを八重山に持ち込んだ人びと」として八重山で唯一無二のポジションを与えることができ、八重山と台湾の関係を植民地期から今に至る「連続」した系譜とみることはたやすい。他方、宮古では、T-1-1は、あまたいる商業者の1人として存在していたわけだから、とりたてて記録/記憶されることはなかったといえるのではないか。宮古地方において台湾系の人々の位置づけを鮮明にすることが難しかったからこそ、彼ら/彼女らをめぐる記憶は「連続」せずに「断裂」し、個別に「散在」する結果につながったと考えることができよう。

地理的な近さから「先島」と総称される宮古と八重山だが、植民地台湾からやってきた人々の足取りは一樣ではない。米の流通に関与した宮古、パインや水牛など農業と深く結びついた八重山といった具合にその暮らしぶりには相違点があり、台湾系の人々に対する記憶の濃淡もこの差異から導かれているのである。

本稿では以上のように、植民地期の台湾から宮古へ移動してきた人々について明らかにすると同時に、八重山との比較を通じて、先島地方が内包する台湾人に対する記憶の差異を描き出すことにしている。これが本稿の目的である³⁾。

I 八重山の「台湾」

まず、宮古より先に八重山について述べておこう。八重山における台湾系住民の足取りについては、宮古のそれに比べると研究の蓄積が豊富で、ひとつの連なりをもって示されてい

3) 本稿では、宮古におけるパイナップルや水牛、また、八重山における米穀の流通については検討していない。本来であれば、宮古と八重山の双方について、パイナップル、水牛、米穀の流通をすべて検討して両地域の差異を論じざるべきであった。しかし、本稿はもともと、「宮古の台湾人」という、その存在を明らかにするための手掛かりが乏しい対象にどうアプローチするかという点からスタートしたものであり、究明の過程で米穀流通に着目することになった。さらに、宮古の台湾人の存在を浮き彫りにするために八重山の台湾人を対置し、パイナップルと水牛に言及した。両地域に対して、パイナップル、水牛、米穀の流通を視点に比較することは、今後の課題としたい。

るといってよい。このため、宮古における台湾の記憶を考えるうえで、対照区としての役割を果たしうる。宮古に対する理解を助ける意味も込めて、八重山から取り上げておきたい。

八重山に暮らす台湾系の人たちを取り上げた先行研究としては民俗学の小熊誠〔1989〕が嚆矢となったと考えてよい。加えて、当事者たちによる記録づくりが牽引してきた側面も見逃せない。林発『沖縄パイン産業史』〔1984〕は、台湾から八重山にパイン産業を持ち込んだ当事者による記録として学術分野においても古典的な基本文献に数えられるし、台湾系住民が比較的多く暮らすエリアの人たちが自ら編んだ『嵩田 50年のあゆみ』〔嵩田公民館記念誌編集委員会 1996〕はすでに物故した当事者の証言や写真が豊富に掲載されており、史料的な価値が高い。1990年代までのこうした動きを土台にして、社会学の野入の研究〔2000, 2001〕以降、学術研究が活発化していくことになる。

八重山の台湾系住民に関する記録を残すうえで、沖縄・八重山のジャーナリズムも少なからぬ役割を果たしてきた。とりわけ、三木健⁴⁾の影響力は大きく、編者として林発『沖縄パイン産業史』〔1984〕を世に送り出した⁵⁾ことによって、「八重山のパイン=台湾人が持ち込んだもの」という認識を定着させるきっかけをつくったといつてよい。金城朝夫⁶⁾『ドキュメント八重山開拓移民』〔1988〕は1984年に『琉球新報』に掲載した連載企画を書籍化したもので、台湾を含む沖縄内外から八重山にやってきた人々を初めて網羅的に取り上げ、八重山の成り立ちにおいて、台湾出身者を含む多数の移民が欠くべからざる存在であるとの認識を少なからず広めた。筆者も三木や金城に続く流れを受けて、取材の成果を公表してきた〔松田 2004, 2010, 2013a, 2013b; 国永ら編 2012〕。

以上のような土台があつてはじめて、台湾農業者入植顕彰碑の建立やその後の広がりが生まれたと考えていいだろう。

台湾農業者入植顕彰碑は、2011年3月に発足した台湾農業者入植顕彰碑建立期成会（伊波剛会長）が2012年8月に石垣市登野城嵩田地区に建立した。「台湾農業者入植顕彰碑」と刻んだ石碑と「パイナップル産業と水牛導入の功績を称える」と題する碑文を刻んだ石碑、水牛の置物からなる。

建立の趣旨については、台湾農業者入植顕彰碑建立期成会が2011年3月20日付「「呼びかけ人」のお願い」で詳細に述べている。まず、「戦後の沖縄経済を支えた産業の一つに、パ

4) 石垣市出身。ジャーナリスト。西表炭鉱に関する取材・執筆・研究でも知られ、八重山における移民や外部資本による開発などに一貫して目を向けてきた。これら一連の活動では台湾と八重山との関係に常に目配りしている。

5) 当該書の発行に至る経緯については三木が執筆した「編者註記」や遺族による「あとがき一父に代つて」に詳しい。かいつまんで示せば、林発は1970年に同書の原稿を書き終えていたが、その後の闘病・死去によって出版されないままになっていたところ、三木らが遺族に働きかけて出版にこぎつけた。

6) 本名・友寄英正。1938-2007。石垣市出身。ジャーナリスト。社会運動家。

イン産業がありました」とし、「パイン産業の歴史で私たちが忘れてならないのは、1935（昭和10）年に、台湾から石垣島の名蔵・嵩田⁷⁾ 一帯に入植した台湾農業者の事です。（中略）また、1933年に台湾から入植した人たちにより水牛30頭が導入され、八重山の農業に革命的といえる技術革新がもたらされました」として、台湾人がパインと水牛を八重山に持ちこんだことに対する謝意を示している。そのうえで、沖縄県内各地から八重山向けに行われた入植に目を転じ、「戦後の八重山各地の入植地には、入植記念碑が建立されています。いずれもその集落の人たちが建立したものです。しかし、名蔵・嵩田地区にはそうした記念碑がありません。差別の解消を求めてきた台湾農業入植者たちですが、そこまでは望みませんでした。しかし、これはこの方々自身が建てるものではなく、私たち市民・県民が感謝の気持ちを込めて建立すべきものではないでしょうか。すなわち、この建立の趣旨は、戦前の台湾農業者によるパイン産業と水牛の導入など八重山農業への多大な貢献に対する顕頌と、併せて名蔵・嵩田地域の発展に寄与するためであります」と碑建立の必要性を説いている。

2016年7月には、石垣を訪問した台湾の李登輝元総統が台湾農業者入植顕頌碑に立ち寄り、台湾系住民で組織する琉球華僑総会八重山分会のメンバーが中心となって歓迎している（『八重山毎日新聞』2016年7月31日付）。八重山と台湾のかかわりをひとめで見る事ができる格好のポイントとして、台湾農業者入植顕頌碑が定着していく可能性を示唆した象徴的な出来事といえるだろう。

台湾農業者入植顕頌碑建立期成会の副会長だったXによると、碑の建立は三木の提案によるものだという。Xは筆者が2016年12月に行ったインタビューに答えて、「移民部落では各自で何周年の行事などをやっている。ところが、台湾は昭和初期からこちらに移民してきているにもかかわらず、そのようなことがない。植民地から石垣にやってきていじめられることもあった。そういう歴史を知っている我々（筆者注・Xや三木）がやらないといけない。そういうことを三木のほうから言ってきた」と述べている。「呼びかけ人」のお願いの内容と重なる認識だが、「そういう歴史を知っている我々」といった語り口には、八重山において台湾人に対する偏見や差別が強かった時期を知っている者としての自覚がみられる。Xは1939年生、三木は1940年生で、石垣島にある県立八重山高校を同輩として卒業している。

台湾農業者入植顕頌碑建立期成会は碑を建立した翌年の2013年4月に八重山台湾親善交流協会に発展解消し、会長にはXが就任した。事務局は石垣島にあるが、2013年7月には沖縄本島の会員が沖縄支部を結成した。会員は約250人を数える。役員には琉球華僑総会八重山分会の役員が含まれているが、会員の大多数は台湾系ではない八重山住民や八重山出身者

7) 名蔵・嵩田地区は台湾系の住民が比較的多く暮らす地域である。行政上は異なる区域で、名蔵が石垣市宇名蔵、嵩田は石垣市宇登野城の小字だが、地理的にひとつらなりになっていることから「名蔵・嵩田」と称されることがある。

である。会の目的については、会則の第2条で「本会は八重山台湾親善交流を深める活動を行う」とうたう。2016年末までに、八重山の芸能公演を彰化県員林鎮と屏東県屏東市で開いているほか、台湾の舞踊団や高校生を招いた公演を石垣市内で2回、沖縄県浦添市で1回開催した。シンポジウムも石垣と那覇で1回ずつ開いている。関連する書籍の出版やドキュメンタリー映画の制作への協力も行った。2016年3月の台湾南部大地震と台湾を襲った2016年7月の台風1号では、八重山地区の住民向けに被災者支援の募金を呼び掛けた。

八重山台湾親善交流協会の活動は継続的に行われており、台湾農業者入植顕頌碑期成会が目指した「パイン産業と水牛の導入など八重山農業への多大な貢献」を顕頌する意図は一定程度の広がりをもって定着したと考えていいだろう（年表参照）。

現在の八重山において、パインは重要な農作物であり、水牛は観光分野と密接にかかわっている[国永ら編2012]。八重山によって欠くべからざる産業資源が植民地台湾から持ち込まれたという記憶は、その八重山に住む人々の手によって着実に引き継がれているのである。

年表 台湾農業者入植顕頌碑と八重山台湾親善交流協会に関連した動き

- 2011年3月：台湾農業者入植顕頌碑建立期成会が発足
- 2012年8月：台湾農業者入植顕頌碑を建立
- 2013年4月：八重山台湾親善交流協会が発足（期成会のメンバーが母体）
- 2013年6月：シンポ「台湾交流・過去と未来を考える」
- 2013年6月：石垣島でフィールドワーク
- 2013年7月：台湾員林で公演「八重山の歌と踊り」
- 2013年7月31日：沖縄支部発足
- 2013年9月：役員が土地公祭に参加（以後、毎年参加）
- 2014年1月：県立博物館・美術館でシンポ「台湾体験を語る会」
- 2014年4月：「龍の舞い 八重山パイン物語」発行
- 2014年8月：浦添で台東民俗芸能沖縄公演「躍動の交流」
- 2014年9月：員林鎮の侯慧鈴舞踊団が石垣市内で公演
- 2015年7月：映画「はるかなるオンライン山」
- 2015年8月：会報「オンライン山」1号発行
- 2016年3月：台湾南部大震災の被災者支援で募金呼びかけ（32万円余）
- 2016年5月：台東高級商業職業学校が石垣市内で公演
- 2016年6月：台湾屏東の琉球人墓で慰霊の舞踊を奉納、屏東市内で公演
- 2016年7月：台風1号で被害を受けた台東高級商業職業学校の支援で募金活動
- 2016年7月：護国寺の台湾遭害者之墓で芸能を奉納

2016年7月：李登輝元総統が台湾農業者入植顕頌碑を訪問

II 植民地台湾から宮古に渡った台湾人の概要

八重山の状況が理解できたところで、植民地台湾から宮古にやってきた人々についてみていこう。

宮古地方を構成する地方自治体は宮古島市と多良間村である。宮古島市は宮古島、池間島、大神島、伊良部島、下地島、来間島の6島からなる島嶼地域で、住民生活に不可欠な拠点施設は旧平良市の市街地に集中する傾向があり、本稿で取り上げる台湾出身者の商店（以下、T商店。T商店を営む家族の構成員は「T」で示す）もそのなかに位置する。

宮古地方の台湾系住民を対象とする先行研究では、呉 [2010] が社会学の立場から、戦後、台湾から宮古向けに行われた人の移動の要因として婚姻などを挙げている。

堂前 [1995] は、廃藩置県前後から沖縄戦の直前までの期間に宮古島平良にやってきた商人が形成した商業空間を分析し、台湾から来島した商人の存在を指摘している。堂前はこのなかで、商人が宮古以外の地域から移動してくるパターンを、(1) 他県人が直接宮古へ来て寄留する、(2) 他県人がまず那覇に来て、その後宮古に進出して寄留する、(3) 宮古以外の沖縄県人が宮古へ直接来て寄留する、(4) 台湾の人たちの経済活動、の4通りに分けている。本稿が着目するのは4番目の「台湾の人たちの経済活動」だが、堂前は「注」として「1943年の宮古商工会の会員名簿には、107名の会員中7名の台湾出身者が掲載されている」と述べるに留め、分析は行っていない。この名簿は平良市史編さん委員会 [1978] が採録している資料「『宮古商工会二十年史』(1943年)」⁸⁾にある「会員名簿」を指していると考えられる。「会員名簿」には個人として104人、団体として3者の名前があり、このなかには方、林、李、許の名字を持つ3文字の名前の人物が7人おり、堂前 [1995] の「7名の台湾出身者」という指摘と一致する。この7人が台湾出身者かどうかについては本章で検証する。

地元宮古で行われている郷土史研究に目を転じると、宮古郷土史研究会が1978年9月14日に開催した例会で下地常政が「寄留の系譜」と題した発表を行っている [宮古郷土史研究会 1978: 6]。ただ、ここでは沖縄本島や日本本土からの寄留を分析対象とする一方で、「台湾からの寄留(中略)もあるが、その歴史的意義というのはまだこれを評価するのが尚早で、郷土史研究の対象としてなじまないのではないかと考えこれを除くこととする」として台湾

8) 筆者が宮古島で調査した限りにおいては「宮古商工会二十年史」の実物は確認できていない。『平良市史 第4巻』[平良市史編さん委員会 1978]は「宮古商工会二十年史」の提供元として宮古島市内の事業者とその住所を示しており、筆者は2014年3月10日、これを手掛かりに事業者の関係者と宮古島市内で面談したが、現存していないとの回答を得た。

人については取り上げておらず、堂前 [1995] と同様の傾向がみられる [下地 1979: 1]。

筆者の調査においては「宮古商工会二十年史」(1943年)にある「会員名簿」をベースとして、インタビュー調査によって情報を追加していく方法を取った。宮古在住の台湾出身者が掲載されている新聞記事も利用した。インタビューは、▽植民地期から宮古島市で暮らした男性の息子1人、▽植民地期に宮古在住経験のある台湾在住の男性1人、▽宮古在住経験のある男性の養女1人▽戦後宮古に移り住んだ台湾人の息子で宮古島市在住の1人、台湾在住の1人とその娘1人、▽戦後宮古に移り住んだこの台湾人の知人で那覇に住む男性1人の計7人から行った。このうち、植民地期の台湾から宮古に渡った経験のある人物その人に対してインタビューしたケースは1人に限られている。(表1参照)

表1 植民地台湾から宮古に渡った台湾人の概要調査に関連するインタビュー

	生年	性別	居住地	宮古在住経験	インタビュー日時
T-1-4の息子	1959	男	宮古島市	戦後の宮古で生育・在住	2013年9月12日
t-1(T-1-1の長男)	1933	男	新北市三重区	植民地期に宮古在住歴あり	2014年1月13日, 2015年1月10日。
b-2(B-1の養女)	1946	女	新北市三重区	宮古在住経験なし	2014年1月13日, 2015年1月10日
F-1の息子1	1943	男	新竹市	宮古在住経験なし	2015年1月9日
F-1の息子1の娘	1973	女	新竹市	戦後に宮古在住経験あり	2015年1月9日
F-1の息子2	1953	男	宮古島市	戦後の宮古で生育・在住	2014年12月1日
P-1(F-1の知人)	1929	男	那覇市	戦後に宮古在住経験あり	2014年12月21日

その結果、植民地期の台湾から宮古島に渡った人たちは「宮古商工会二十年史」の名簿にある7人のほかに8人いた(表2⁹⁾)。これら合計15人の性別は男13人、女2人であった。大まかに5つの「家」に分けることができる。このうち、TとBについては、t-1とb-2へのインタビューからかかわりが深いことが分かった。また、15人のうち、2人は現在の中華人民共和国福建省泉州市の普江から台湾を経て宮古島に渡っていた。

9) 右頁表2には18人を掲載した。植民地台湾から宮古に渡った台湾人15人以外の3人は、▽終戦から間もない時期に宮古に渡った台湾人2人▽戦後、植民地期に宮古に渡った台湾人の養子となった人物1人である。

表2 戦前、宮古島にいた可能性のある台湾系の人物

	「宮古商工会二十年史」の記載		出生年	出身	備考	
	あり	なし				
T (7)	T-1-1	男性		宜蘭・頭城	長男。頭城で学校を卒業し、基隆で米を売る仕事をする。基隆の米屋で「小僧」をしていた。24歳の時、宜蘭で結婚し、23、4歳だった1933年ごろ兄弟で宮古へ。B-1とB-2の夫婦も一緒である。妻は出産後、長男(t-1)を連れて宮古へ。宮古では兄弟で雑貨屋経営。魚と野菜以外を取り扱う。米、茶、砂糖、塩、缶詰、本などを販売。場所は棧橋に1カ所、平良市に1カ所。水源地となっている白川付近に面積2、3甲の農場を持ち、イモや野菜、ヤギ、トリを飼い、雑貨屋で売っていた。自分たちでも食べていた。台湾へ引き揚げるときに農場は処分。宮古にはT-1-4だけが残り、店をみていた。T-1-4は軍隊に糧食を収めていた。台湾へはBとともに引き揚げ、頭城に身を落ち着かせた後、戦後台北に出てきた。墓は真寮にある。	
			T-2			女性
		t-1	男性	1933	宜蘭・頭城	T-1-1の長男。1933年12月生まれ。生後2カ月でT-2と宮古へ。平良第一国民学校4年のときに家族と台湾へ引き揚げる。
	T-1-2	男性		1935?	宜蘭・頭城	T-1-1の2歳下の弟。次男。神戸に行っていたことがある。
		T-1-4	男性	1916	宜蘭・頭城	T-1-1の弟。四男。1916年生。小学校卒業。17、8歳で宮古へ。終戦前に兄弟が台湾へ引き揚げるときは、ひとりだけ宮古に残り、店をみていた。戦後、台湾からやってきたF-1に農業を教えた。生前は宮古から台湾に帰ろうとしなかったが、死後はお骨を台湾の墓に入れるということだった。
		T-1-5	男性		宜蘭・頭城	A-1-1の弟。五男。宮古で死亡。
		T-1-6	男性		宜蘭・頭城	A-1-1の弟。六男。宮古で高等科まで出た。
B (3)	B-1	男性		福建省泉州晉江県	台湾で子供が生まれた。だいたい1歳で亡くなった。基隆でT-1-1と知り合って一緒に宮古に渡る。妻も同伴した。基隆に住む親戚が1人いるため、基隆で知り合ったのではないかと推定される。まずTで働き、その後自分で商売をする。棧橋の近くで米だけを売る。店の屋号はマルリ(「李」をマルで囲む)。Tとともに宮古から台湾へ引き揚げ、台湾で死去。戦前、宮古にいた台湾人としては最年長。b-2は10歳のとき、すなわち1956年に養女になっているが、B-1は当時68歳。このためB-1は1888年生と推定される。	
			B-2			女性
C (3)	C-1-1?	男性			埔里	ふたりは兄弟ではないか。T-1-1と同世代。棧橋辺りに小さな店を持ち、Tと同じような商いをする。台湾に引き揚げている。Tの農場を手伝っていた。
	C-1-2?	男性			埔里?	
		c-1	男性	1929?		t-1の4歳上。
D (2)	D-1-2	男性			金山(金包里)	宮古へ台湾から最初に来て居付いた人(T、Bより先に宮古へ来ていた)。金山(日本時代の金包里)出身。米を販売していた。宮古移住後、ずっと沖繩にいる。
	D-1-1	男性				
E (1)		E-1	男性			

記号・数字:大文字は家を、()内はその人数を示す。小文字は、大文字の人物の子どもでもある。
 2桁目の数字は、1は男を、2は女を示す。
 3桁目は、兄弟姉妹の出生順を示す。

III 宮古在住台湾人 T 家の T 商店をめぐる考察

植民地台湾から宮古島にやってきた台湾人の姿をより明らかなものにするため、具体的なケースとして T 商店について詳しくみておきたい。本稿では、本章に続く IV 章で宮古地方に残る台湾系の人々に対する記憶について検討することになっているが、このなかで T 商店は重要なポジションを占める場所でもある。

まず、T 商店の所在地についてであるが、その確認作業は、宮古島の目貫通りとなっている西里大通りの 1932-33 年ごろの様子と現在の様子を示した絵地図「西里大通りのんきゅん（むかし）／西里大通りのんなま（いま）」〔西里大通り商店街振興組合 2014〕を参照するとともに、2014 年 3 月 10 日には宮古島市で企業の役員などを歴任した Q-1 の案内で関係先を踏査した¹⁰⁾。Q-1 は、西里大通り商店街振興組合の絵地図の基となった図面の作成者である。

II 章で明らかにした宮古在住台湾人 15 人のうち、沖縄で発行されていた戦前の新聞で名前が確認できる人物は T-1-1 と C-1-1 の 2 人である。T-1-1 は 2 回、C-1-1 は 1 回それぞれ確認できた。C-1-1 の 1 回には T-1-1 も載っており、これは 1939 年 12 月 2 日付の「琉球新報」3 面に掲載された「米穀卸商業組合設立登記公告」である。米穀卸商業組合の役員は理事 3 人、監事 2 人からなり、T-1-1 と C-1-1 はいずれも監事に名を連ねている。組合の設立許可は 1939 年 9 月 20 日、登記年月日は 1939 年 10 月 25 日となっている。

T-1-1 の名前が載っているもう 1 回は、1939 年 5 月 31 日付の「琉球新報」4 面に掲載された「南開商会設立登記公告」である。株式会社南開商会の設立の公告に、6 人の取締役の 1 人として名前が挙がっている。公告によると、南開商会は旧平良町西里に本社を置き、資本金 10 万円。事業内容はセメントや石炭、油類などの販売と海陸産物の委託販売である。6 人の取締役の住所はすべて旧平良町西里で、台湾からやってきた人物は T-1-1 のみである。登記年月日は 1939 年 5 月 10 日となっている¹¹⁾。T-1-1 は 1933 年に台湾から宮古に渡っていることから、その 6 年後には宮古で企業や組合の設立に関与するまでになっていたことになる。

なお、米穀卸商業組合の理事・監事と南開商会の取締役の両方に名を連ねているのは、T-1-1 ともう 1 人だけである。また、「宮古商工会二十年史」にある 1943 年の名簿には、米穀卸商業組合の理事と監事合わせて 5 人すべてが掲載されている。南開商会は、取締役 6 人のうち 5 人、監査役は 2 人がいずれもそれぞれ掲載されていた。

このうち、T 商店を戦前に開いたのは T-1-1 から T 家の兄弟たちと考えられる。この商店は、

10) 2014 年 3 月 10 日に宮古島市東仲宗根の自宅で Q-1 にインタビューした後、Q-1 の案内で T 家と関係する場所を訪れた。

11) 筆者は沖縄県立図書館が所蔵する『琉球新報』のマイクロフィルムでふたつの記事を確認したが、不鮮明な部分があった。このため、本稿では、同じ記事を採録している平良市史編さん委員会〔2005〕の 681、693、694 ページから引用した。

戦後は T-1-1 の弟、T-1-4 が引き継いでいる。

すでに表 2 で示しているが、T-1-1 と B-1 は 1933 年に、一緒に台湾から宮古に渡っており、当時の宮古にはすでに D-1-1 と D-1-2 がいた。T-1-1 は港の棧橋近くの R 地点と現在の西里大通り内の S 地点に拠点を設けている。R 地点は、「小屋毛（くやもう）」と呼ばれるエリアに位置している。「小屋毛」と西里大通りについては、稲村 [1972] が「中山朝貢が始まって後、漲水の船着き浜近くに小屋毛と称する寄留商人の部落ができてきたことも考えられる。(中略) この小屋毛の寄留商人部落は、明治になって郡外からの輸入物資がますます多くなり、そのうえ土地が偏狭であったために次第に衰微して、その代り西里大通の繁栄をみるようになった」と述べている [稲村 1972: 423] ように、「小屋毛」と西里大通りはいずれも宮古島のなかで商業機能が集積していたエリアである。

その後、T-1-4 が 2011 年に死去したとき、自宅を兼ねた店舗は市場通りの U 地点にあった。T-1-1 が構築した R 地点と S 地点からさらに第 3 の場所へ移ったわけである¹²⁾。

宮古にいた台湾人がどのような商売を営んでいたのかを読み解く数少ない手掛かりは、T-1-1 と C-1-1 が監事を務めていた米穀卸商業組合¹³⁾である。T-1-1 の長男で、戦前の宮古島で暮らした経験のある t-1 は「宮古の時は、台湾人の人は向こう（筆者注：「宮古」を指す）では大部分は雑貨屋。なんでもやるよ。大部分は米。私の店なんか、缶詰もやるよ。砂糖、それから、昆布、お茶もやるよ」と述べており、宮古在住の台湾人と米の商いは関連が深かったことを示唆している。

宮古の米作について仲松は「宮古諸島は琉球石灰岩で構成された台地であって、極端な水田寡少地域であり、その総面積は僅かに百五十町歩水田度は 1% 余に過ぎず、列島の中で最下位に属する」と述べ、沖縄県内で最も水稻栽培に適さない地域と位置付けている [仲松

12) T-1-1 とともに宮古島に渡った弟の T-1-4 が 2011 年 4 月 7 日に死去したことに合わせて、その「忌明御礼」が 2011 年 5 月 26 日付の『宮古新報』と『宮古毎日新聞』に掲載されている。執筆者は T-1-4 の息子であるが、そのなかで T-1-4 の来島時期は「昭和八年」、すなわち 1933 年とされている。一方、1932-33 年ごろの様子を示した西里大通り商店街振興組合 (2014) によれば、T-1-1 がすでに西里大通りに店を構えていたことになる。そのようなことが実際に可能かについては検討の余地があるが、聞き取りやかかつての記憶を頼りにした分析であることから、年代に数年のずれが生じるのは誤差の範囲内としておく。本稿では、T-1-1 や T-1-4 と身近に接していた T-1-4 の息子の手になる「忌明御礼」の内容に沿って論述することとした。

13) 李 (2009) によると、1939 年に台湾で米穀移出管理制度が実施された後、朝鮮と沖縄への移出については、それまで朝鮮・沖縄向けの移出を行ってきた商人が 1939 年 11 月に「台湾米穀移出組合」を結成し、台湾総督府の委託を受けて沖縄・朝鮮向け移出米を取り扱った [李 2009: 326]。宮古で 1939 年 9 月 20 日に米穀卸商業組合が結成されたことと関連のある動きとも考えられるが、那覇外地米移入協会代表者の田代忠吉と伊地完雄は、台湾総督府米穀局長の田端幸三郎に提出した 1939 年 10 月 30 日付の「移出許可申請願」(国史館台湾文献館所蔵「沖縄仕向一、二期蓬莱白米移出許可申請ニ関スル件伺」冊号 10430, 文件号 029) で「本県(宮古、八重山を除く)に於る御地との蓬莱米の取引」と記しており、台湾産の米を移入するその流通においては沖縄本島と先島の間になんらかの違いがあったとも考えられる。

1941a: 74-75]。その理由として挙げているのは地質で、「隆起珊瑚礁の石灰岩台地より成る宮古諸島（中略）は（筆者注：水田の）寡少或は皆無地域を形成することを知り、且つそれは水利の良否に依ることを明白にした。珊瑚石灰岩の地域ではたとへ雨量が多くても、地中へ浸透して、地表は乾燥し、地下水が崖端或は裂罅から泉となって湧出する結果として、珊瑚礁台地の周縁地域に於ては、水田の発達佳良である」とした [仲松 1941a: 75]。隆起珊瑚礁の石灰岩台地は水を蓄えるのに不向きということである。

水田として新たに開発可能な地域の面積については、仲松が「島尻並びに中頭地方と宮古島は水利が不便な関係から、合計約 130 町歩の可耕地が存在するのみであり、各地に散在しているから開発は更に困難である」と述べ、消極的な評価にとどまっている [仲松 1941b: 90]。

沖縄県宮古教育会は宮古の米作について「本郡には昔から栽培され甘蔗甘藷の渡来以前には粟、大豆と共に本郡の主産物であったが、水田の多くないのと風旱害の危に逢ふので、漸次耕作が減少して現在は甘蔗及甘藷に其の地位を譲るに至った。而し県当局の指導と品種の改良によって栽培を奨励した結果、近年は面目大いに改まり昭和 7 年の第 1 期作より、改良品種蓬莱米の栽培に着手以来相当の成績をあげた」と述べており、悪条件の中にあっても増産に向けた試みが取り組まれていたことが分かる [沖縄県宮古教育会 1937: 214-215]。その一方で、沖縄県宮古教育会（1937）は宮古の商業に言及しつつ、「米は産額少きため、台湾蓬莱米¹⁴の気重に任せら、一進一退をなしてゐる」としているところからみて、その取り組みは必ずしも十分な成果を上げることができず、「台湾蓬莱米」、すなわち、台湾での栽培された米に依存する状態になっていた [沖縄県宮古教育会 1937: 214-215]。稲村 [1972] にいたっては「本島は水田面積が少ないために、稲作には将来共多くを期待することはできない」と言い切っている [稲村 1972: 416]。

米を自賄いできない以上、宮古以外の地域に求めるほかない。そのなかで台湾に対する依存度がどの程度だったかという点は、台湾からやってきた人たちが宮古の商業空間に自らのポジションを獲得できたかを推し量る材料となりうるはずだ。

まず、宮古を含む沖縄全体について考えるうえで興味深いのは、台湾米穀移出商同業組合が発行していた「台湾米穀移出商同業組合月報 第 6 号」（1917 年 6 月）に掲載された「沖縄移出米／将来有望なり」という一文である（11 ページ）。

全文を紹介しよう。（字句の修正と句読点の挿入を行った箇所がある）

14) 日本本土から台湾に持ち込まれて栽培・改良された米。「蓬莱米」の名は、日本米穀協会が 1926（大正 15）年 5 月に台北市内のホテルで開いた大日本米穀会第 19 回大会のなかで、当時の台湾総督、井沢多喜男が付けた。磯 [1964] を参照した。

本島米の沖縄に移出さるるもの、ようやく盛んにして、昨年の如き15万石の移出高を呈せり。同島は人口70万人ありて、仮に1人1石を1箇年に消費するとせば、70万石の米を要する訳なるが、島内の産米高は僅かに7万石に過ぎざるをもって63万石の不足を呈すと雖も、島民の多く甘薯を常食とする者あり。その半数以上が米食とするも、尚2,30余万石の不足を呈し、島外の供給を仰がざるべからず。これに加えて、近年同島の糖業旺盛に糖価高価なれば、農家も好景気を来たし、生活上に伴い、米食するもの益々増加の一方にして、甘薯常食は年々減少の状態なり。ゆえに本島米が同島民の常食に好適するのみならず、今後益々増加一方なれば将来における本島米の移出供給地としてますます有望に上、得意のところと称すべしと。

沖縄のことを「将来における本島米の移出供給地としてますます有望」と述べているのだから、この時点では「本島米」、すなわち、台湾産の米の移出先として沖縄は未開拓だったことになる。

李(2009)によれば、沖縄では1925-29年には、全消費量に占める台湾米の割合は9.61%となった。これはいわゆる「内地」では最高の数値で、2位の福岡を4ポイント以上引き離している。[李2009: 214-215]

それでは、宮古に限ってみるとどうか。台湾から宮古に直接移入した米が、宮古に移入された米全体に占める割合の推移をみてみよう。

数値は「沖縄県統計書」の各年版に依拠し、年次的に継続してデータを確認することができる1920年から1940年を対象とした。年ごとの数値は1年違うだけで桁がひとつ異なる場合があるなど、ばらつきが大きいので、前後2年間の値を合算した5年間の平均値を用いることによって平準化し、推移の傾向を掴むことにした。移入の量は「俵」や「袋」など年によって異なる複数の単位が用いられていることから、「額」を元に算出した。

その結果はグラフに示す。台湾から宮古に直接移入した米は、1925年までの4年間はまっ

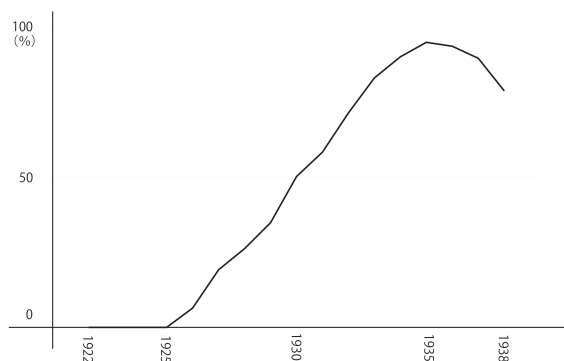


図1 台湾から宮古に直接移入された米が、宮古に移入された米全体に占める割合の推移(1922年～1938年)

(年次ごとのばらつきが大きいので、前後2年間の平均値を算出した。金額ベース。『沖縄県統計書』各年版から筆者作成。)

たくなかったが、1926年以降一定のペースで増加し、1935年には94.5%に達した。年間10%近い増加率である。宮古で自給できない米の不足分を調達する先として、台湾への依存度が高まり、その流通の担い手がいたことを意味してもいる。

宮古島の人々が台湾で生産される米への依存度を高めていたという事実をもって、台湾からやってきた人びとが商いのチャンスを獲得したと結論付けることはできない。ただ、台湾から移入する米の量が増えることによって、米穀商の取扱高が増加し、T-1-1とC-1-1のような台湾人たちがパイの分け前を獲得できたと推定することは不自然ではないだろう。

宮古島の物流拠点だった戦前の平良港がどのような状況にあったか確認しておく、『平良市史 第10巻』には「大正10(1921)年2月、立津村長の時、起債による第2次埋立工事(栈橋の延長・荷揚場の拡張)が着工され、同年11月、下地寛路村長の時に竣工した。この間の大正4(1915)年8月には寄留商人・渡辺覚之丞を社長とする宮古通船株式会社(運送業)が設立された。この頃、先島航路には大阪商店会社の客船が配船されていた」とある[平良市役所・平良市教育委員会編2005:22]。内閣府沖縄総合事務局平良港湾工事事務所[2004:20]は、戦前の平良港について「この港湾施設は大正9年当時の平良村に移管され、さらに大正10年公有水面埋立許可を得て拡張工事が施工されました。昭和8年頃に、大阪商船の2500トン級の商船が、那覇～宮古～八重山～基隆間に就航し、本土、南西諸島、台湾との交易の門戸となり、以来第2次世界大戦終結まで生活必需品等の移出入や旅客の乗降等、圏域の拠点港として利用されてきました」と、それぞれ述べており、台湾からの米の移入は港湾のハード整備と航路の充実と相まって増加していたことも指摘しておきたい。

IV 来間島の高齢者の記憶に見る宮古在住台湾人の姿

筆者がこの島へ赴くことになったきっかけは、T-1-4の息子に対するインタビューにある。T-1-4の息子は、来間島の人たちがT商店を利用するケースがあったと言及し、筆者はこれに着想を得て来間島を調査地を選んだのである。調査の目的は、植民地台湾から渡ってきた台湾の人たちのことを、宮古地方の人たちがどのように記憶していたかという点を探ることにある。

来間島は宮古島の南、約1.6キロに位置する平坦な島である。美しい海岸で知られる宮古島の与那覇前浜は来間島の対岸に当たり、かつて来間島との間で船が行き来していたが、1995年には全長1690メートルの農道橋「来間大橋」で結ばれている。来間大橋は2001年に旧下地町の町道として認定され、現在は宮古島市の市道である。

沖縄県編「離島関係資料」(2014年)によると、島の海岸延長は7.6キロで、面積約2.75平方キロメートルのうち、畑地が1.74平方キロメートルで56.4%を占める。主な作物はサ

トウキビと葉タバコである。

人口は減少傾向にあり、来間大橋がまだ開通していなかった1986年の時点で、すでに「急激な過疎化の波により20代～40代の労働人口の流失が目立ち、60代以上の高齢化の傾向が著しい人口構成になっている」と指摘されていた〔下地町立来間小・中学校1986:99〕。人口は最近の10年間では、2006年の197人から2016年の165人へと32人(16.2%)減った〔宮古島市2007-2016〕。島内唯一の教育施設である小中学校は、児童生徒数の減少のために2013年度で中学校が閉鎖され、2014年度からは小学校のみとなっている〔琉球新報2014年3月13日付〕。65歳以上の住民の人口は、2010年の国勢調査によると、全体の51.6%を占める。

この来間島で、筆者は2014年12月1日と2016年2月12日にインタビュー調査を行い、8人から話を聞いた¹⁵⁾。2014年8月にも来間島で島民と接触し、インタビューの選定に必要な情報収集などを行った。

インタビュー8人のうち、T商店について具体的に語ったのは2人である(以下、G-2、M-2とする)。2人に共通しているのは、▽現金収入に乏しい島の生活にあって、▽T商店は島民が持参した手工芸品や野菜などを購入して現金を与え、その現金でT商店から米などを購入することができた、▽島民がT商店に持ち込んだ代表的なものはアダンの蔓で編んだ縄であるといった点である。

以下、具体的にみていこう。

【G-2のケース】

G-2はT商店について「食料がいっぱいあって、来間はそのときにはお金はあまりない島でしたから、よく助けてくれたよ」と語った。また、T商店の屋号も覚えていた。「助けてくれた」という意味を筆者が問うた後のやり取りは次の通り。

G-2: アダンのツタ〔筆者注:「蔓」の意〕分かる?

筆者: 縄ですよ?

G-2: あれを取ってきて、縄を編んで、お婆さんが、実家にお婆さんがいたから、それに縄を編ませて、貯めていって、(中略)交換してきた。

G-2は生家の祖母に編ませたアダンの蔓の縄をT商店に持参し、その代金で米などを購入していた。G-2は同じようにして熟していないトマトなどもT商店に持ち込んでおり、「そ

15) 内訳は女5人,男3人。出生年は1926年から1947年までで、このうち、戦後生まれは男1人だけである。

れの代は米と昆布を（中略）取ってきて」と述べているが、これは商品価値が著しく低い農産物であっても T 商店が買い取っていたことを意味している。

このようなことをしていた時期について G-2 は「子どもなんかが小さいとき」と述べた。G-2 は 1947 年に結婚し、その後 10 年ほどの間に子どもを 5 人設けていることから、台湾人商店に通ってアダンの縄などを買ってもらっていたのは 1950 年前後のことと考えられる。

G-2 が T 商店を経営していた T-1-4 について語った言葉としては『あんた（筆者注：G-2）を信用しているから子どもたち（中略）にはひもじい思いをさせないで、なんでも取って作りなさいね』って。台湾人だと、そんな、人に情意があるかなと驚いておった」というものがあるが、G-2 は T-1-4 との接触を通して宮古在住の台湾人について認識し、その印象を形成していた。

【M-2 のケース】

M-2 が T 商店に対して抱いている印象ははっきりしており、筆者が「来間の人たちが平良に行ったときに、どこのお店で買い物をしていたのか知りたい」と尋ねたのに対して、躊躇なく「昔は『タイワンヤー』といって、向こう必ず行って買ってきて」と答えた。屋号は記憶していなかったものの、その場所は「市場通りに」と述べている点からみて、G-2 が利用していた商店と同じとみてよい。

ただ、T 商店を使用した理由についてはいったん「そこが近いから。船から降りたら近いから」と港と近接した立地条件を挙げ、筆者が「ほかの店に比べて、このタイワンヤーがいいというところは何かあったか」と尋ねてようやく「昔はお金もないから、アダンのアダナス（筆者注：アダンの蔓で編んだ縄）というよ、（中略）それを持って行って『タイワンヤー』の人に売ってから、品物を買ってきて」と、G-2 同様に買い取りへの対応を挙げた。

M-2 にとってこれは単なる商行為ではない。「それ（筆者注：アダンの縄¹⁶⁾）をつくって、お金がないから、それで生活しておったよ。苦しい時代でした」と回想しているように、生活が困窮するなか、T 商店に手を差し伸べてもらったという意味がある。アダンの縄の代金として受け取った現金で「タイワンヤー」から購入するものとして M-2 が挙げたのが米である。そのやりとりは次のようなものである。イモが主食だったことを説明したくんだりから採録する。

M-2：おイモ。おイモが食料だった。

16) M-2 の場合、アダンの縄は 15 尋（約 27 メートル）編んだものを束ね、それが 10 束ほどできあがったところで、船で宮古島に向かい、「タイワンヤー」に売っていた。10 束分を編うのに 10 日ほどかかった。

筆者：お米を食べるようになったのはいつごろ？

M-2：お米も、アダナスの綱、あれを売って少しずつ買ってきて、おじやを作ったり、少しずつ。

筆者：お米はアダナスのお金で。

M-2：少ししか買われなかった。それを、おかゆを作って食べたり、ご飯もつくらなかったよ〔筆者注：米だけで飯を炊くことはほとんどないとの意味〕。

M-2がアダナスの綱を「タイワンヤー」に売っていた時期は「旦那さんも見付からんときだったから、若い時だった」と述べており、結婚する前だったことになる。M-2は22歳のころに結婚したと説明しているため、1951年より前ということになるが、これはG-2の項で指摘した「1950年前後」とほぼ一致する。

G-2とM-2の語りから見えてくるのは、困窮しがちの生活に手を差し伸べてくれる存在としてのT商店である。とりわけ、G-2はT商店の経営が「良心的」である要因として、台湾人による経営を指摘している。T-1-4の姿は、G-2には時には商売を度外視しさえする思いやりのある台湾人として認識・記憶されており、これはM-2にも共通する。一方、「タイワンヤー」との呼び名は、T商店が台湾とかかわりの深い存在と認識されていた可能性を示唆するものと言えなくもないが、M-2ただ一人からしか聞くことができなかった。

V 連続・断裂・散在する記憶

冒頭で述べたように、宮古島市内にある下地中学校には、牡丹社事件の和解を意図した記念碑「愛と平和」がある。下地中学校は1999年に宮古で開かれた第15回全日本トライアスロン宮古島大会に出場するために来島した台湾人選手の交流したことをきっかけに台湾側との交流を深め、2004年12月、台中の漢口国民中学（日本の中学校に相当）と姉妹校の締結を行った。この翌年の2005年7月には台湾との交流について展示する「台湾交流つむかぎ中心」を多目的教室の一角に開設するとともに、「台湾の森」と刻銘した石碑を中琉文化経済協会の蔡雪泥理事長から寄贈され、その除幕式を行った〔宮古島市立下地中学校2008: 2-3〕。記念碑「愛と平和」があるのは「台湾の森」の中である。

下地中学校は、宮古における台湾との交流拠点となっているともいえるのだが、その活動においては植民地期以降の台湾から宮古への人の移動や、来間島の高齢者たちの語りにもみられる記憶などが言及されることはない。ここでは、台湾をめぐる記憶は、植民地統治が始まる前に起きた牡丹社事件を取り上げた後に「断裂」し、植民地期に台湾からやってきた人々に対する記憶には触れないまま、台湾のスポーツ選手との触れ合いに端を発した20世紀末

以降の交流へとつながっていく。

台湾から、ではなく、宮古から植民地期台湾に向けて行われた人の移動についていえば、1935年12月末の時点で、現在の宮古島市に当たる旧平良町、旧下地村、旧城辺村、旧伊良部村の出身者合わせて792人が植民地台湾で暮らしていた。アジア太平洋戦争末期に行われた疎開では、終戦直後の1945年9月には宮古出身者4892人が台湾にいたとするデータもある¹⁷⁾。戦後の帰郷では、宮古を中心とする沖縄出身者が乗り込んだ引き揚げ船が基隆に近い海上で遭難する「栄丸事件」が1945年11月1日に発生し、約100人が犠牲になった。「栄丸事件」については、平良市史編さん委員会〔1981: 45-46〕が取り上げているほか、沖縄県教育委員会〔1974: 403-409〕は概説と証言に計7ページを費やしている。個人史としても池村一男〔1983: 111-119〕などがある。

宮古において、台湾との関係に対する関心が低いわけではなく、焦点を当てる時期や、宮古発台湾行きか台湾発宮古行きかというベクトルの向け方にバラツキがあるといえる。台湾をめぐる記憶は「散在」していると言っていいだろう。

また、八重山では、八重山の現在の農業や観光業とかかわりの深いパインと水牛が、植民地期の台湾から台湾人の手で初めて八重山に持ち込まれており、台湾人が果たした役割に唯一無二性や「分かりやすさ」がある。これに対して、宮古では植民地期の台湾から渡った台湾人が参入した分野が商業で、数多くの同業者のひとつだったことから、取り立てて記録に残されるには至らず、記憶が共有されにくかったといえるのではないかな。

一口に言うならば、台湾に関する記憶は宮古において「断裂」「散在」し、八重山では「連続」しており、互いに対照的な様相を示しているといえるだろう。

先行研究について述べた箇所でも示したように、宮古では1970年代後半にはすでに宮古への寄留を構成するグループのひとつとして台湾出身者の存在に注意が向けられていたが、調査が行われないままの状態が続いてきたとあってよい¹⁸⁾。III章で示した通り、宮古島市内でT商店を営むT-1-4が死去したのは2011年4月7日のことで、より早いうちに調査を開始しておけば、インタビューを行うことができた可能性は相当に高く、宮古に住む台湾系住民の描き出され方は本稿とはかなり趣の違うものになったであろう。一方、八重山では1980年代以降、多方面から台湾出身者に対するアプローチが行われ、台湾出身者自身による記録

17) 国史館台湾文献館所蔵の「沖縄縣疏散來臺人民請遣送救濟案」(典藏号 00306510094003) に含まれている「沖縄縣疎開者調」。アジア太平洋戦争末期に行われた沖縄から台湾向けの疎開については松田図〔2010〕参照。

18) この点については筆者自身も反省を述べておかなければならない。筆者が八重山で台湾系の人たちの取材を開始したのは2002年ごろであり、当時から宮古に住む台湾系の人たちには関心を抱いていた。しかし、八重山に比べると、宮古の台湾系住民はそれほど多くないという情報によりかかる形で調査を怠っていた。

も編まれている。植民地期の台湾から八重山にやってきた台湾人は数百人規模〔嵩田公民館記念誌編集委員会 1996, 松田 2013b〕に達し、宮古にやってきた台湾人より大きな集団を形成していたし、戦後も引き続いて土地公祭が行われるなど、目に付きやすかったことが調査・取材につながっていきやすかったであろうことも容易に想像が付く。植民地台湾から八重山に持ち込まれたパインと水牛は産業資源というリアルな存在であり、過ぎ去った時代の事物という位置づけに留まらない点も、台湾出身者が八重山に与えた影響をトータルに把握しやすくしている。

八重山という地域をひとつの対照区に見立てると、宮古にやってきた台湾人たちは、植民地期から現在に至るまで連続して俯瞰される機会を持ちにくかった人たちと言うことができる。宮古の台湾人に関する記憶の乏しさは歴然としている。ただ、八重山におけるパインや水牛のようにモノを手掛かりにする方法には一定の有益性がある。本稿では米に着目することを通じて宮古における台湾人観の一端を明らかにすることができた。さらに米以外のモノに照準を合わせてみれば、植民地期の台湾から宮古にやってきた人々の態様がよりつまびらかになり、宮古の人々の脳裏に刻まれた別の記憶を探り当ててみるかもしれないのである。

参 考 文 献

池村一男

1983 『戦塵の煽りで』 平良市：私家版.

磯永吉

1964 『蓬莱米談話』 山口：雨読会.

稲村賢敷

1972 『宮古島庶民史』 東京：三一書房.

大浜郁子

2006 「戦加害の元凶は牡丹社蕃に非ず—「牡丹社事件」からみる沖縄と台湾—」『二十世紀研究』7: 79-102.

沖縄県

1920～1940 沖縄県統計書 各年版』 那覇：沖縄県

1935 「植民地在住者調」『沖縄県史 第7巻各論編6 移民』 沖縄県教育委員会（編），64-69 ページ， 那覇：沖縄県教育委員会.

沖縄県教育委員会（編）

1974 『沖縄県史 10 沖縄戦記録 2』 那覇：沖縄県教育委員会.

沖縄県宮古教育部会

- 1937『宮古島郷土誌』平良町：大野商店。
沖縄県八重山事務所
- 2015『八重山要覧（平成26年度版）』那覇：沖縄県。
小熊誠
- 1989「石垣島における台湾系移民の定着過程と民族的帰属意識の変化」『第二回琉中歴史関係国際学術会議報告 琉中歴史関係論文集』琉中歴史関係国際学術会議実行委員会（編），569-602 ページ，那覇：南西印刷。
金城朝夫
- 1988『ドキュメント八重山開拓移民』石垣市：あ～まん企画。
国永美智子・野入直美・松田ヒロ子・松田良孝・水田憲志（編著）
- 2012『石垣島で台湾を歩く 八重山発の地域教材』那覇：沖縄タイムス社。
呉俐君
- 2010「戦後沖縄本島及び宮古島における台湾系華僑の移住」『東アジアの文化と琉球・沖縄—琉球／沖縄・日本・中国・越南』上里賢一ら（編），79-103 ページ，東京：彩流社。
下地常政
- 1979「寄留の系譜」『会報 No.30』宮古郷土史研究会（編），2 ページ，平良市：宮古郷土史研究会。
下地町立来間小・中学校
- 1986『来間小・中学校九十年史』下地：下地町立来間小・中学校。
台湾農業者入植顕彰碑建立期成会
- 2012『台湾農業者入植顕彰碑建立記念誌』石垣：石垣印刷。
台湾米穀移出商同業組合
- 1917『台湾米穀移出商同業組合月報 第6号』台北。
嵩田公民館記念誌編集委員会
- 1996『嵩田 50年のあゆみ』石垣：嵩田公民館記念誌編集委員会。
堂前亮平
- 1995「近代期，沖縄宮古島平良における商業空間の特性—寄留商人街をめぐる」『地域研究』36(1): 1-11。
内閣府沖縄総合事務局平良港湾工事事務所
- 2004「平良港の概要」『平良港湾工事事務所 30年誌』内閣府沖縄総合事務局平良港湾工事事務所，20-21 ページ，平良市：内閣府沖縄総合事務局平良港湾工事事務所。
仲松弥秀
- 1941a「琉球列島に於ける米の自給可能度に就いて」『地理学』9(8): 73-83。

1941b 「琉球列島に於ける米の自給可能度に就いて (下)」『地理学』9(9): 84-91.

西里大通り商店街振興組合

2014 『西里大通りのんきゃーん (むかし) / 西里大通りのんなま (いま)』宮古島市: 西里大通り商店街振興組合.

野入直美

2000 「石垣島の台湾人 生活史に見る民族関係の変容 (一)」『人間科学』5: 141-170.

2001 「石垣島の台湾人 生活史に見る民族関係の変容 (二)」『人間科学』8: 103-125.

平良市史編さん委員会 (編)

1978 『平良市史 第4巻 資料編2 近代資料編』平良市: 平良市役所.

1981 『平良市史 第1巻 通史編2 戦後編』平良市: 平良市役所.

2005 『平良市史 第10巻 資料編9 戦前新聞集成 (下)』平良市: 平良市教育委員会.

平良市役所・平良市教育委員会 (編)

2005 『ひらら一村・町・市一行政97年』平良市: 平良市役所・平良市教育委員会.

松田良孝

2004 『八重山の台湾人』石垣市: 南山舎.

2010 『台湾疎開 琉球難民の1年11カ月』石垣市: 南山舎.

2013a 『与那国台湾往来記 「国境」に暮らす人々』石垣市: 南山舎.

2013b 「植民地統治期台湾から石垣島名蔵・富田地区への移動について 石垣町役場作成の寄留簿の分析を通じて」『移民研究』9: 1-18.

宮古郷土史研究会

1978 「9月例会のお知らせ」『会報 No.21』宮古郷土史研究会 (編), 6ページ, 平良市: 宮古郷土史研究会.

宮古島市立下地中学校

2008 『台湾国際交流10周年記念誌』宮古島: 下地中学校.

宮古商工会

1943 「宮古商工会二十年史」『平良市史 第四巻 資料編2 近代資料編』平良市史編さん委員会 (編), 276-281ページ, 平良市: 平良市役所.

宮良作

2008 『国境の島・与那国島誌 その近代を掘る』那覇: あげぼの出版.

李力庸

2009 『米穀流通與台湾社会 (1895-1945)』台北県板橋: 稻郷出版社.

林発

1984 『沖縄パイン産業史』那覇: 沖縄パイン産業史刊行会.

[新聞]

『沖縄タイムス』

『宮古毎日新聞』

『宮古新報』

『八重山毎日新聞』

『琉球新報』

[ウェブサイト]

沖縄県

2014「離島関係資料（平成26年1月）」2016年3月3日アクセス。

[http://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chiikirito/ritoshinko/documents/
chapter1h26.pdf](http://www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chiikirito/ritoshinko/documents/chapter1h26.pdf)

総務省統計局

「平成27年国勢調査」2016年3月3日アクセス。

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka.htm>

宮古島市

「統計みやこじま」（平成19～28年度版）2018年1月18日アクセス。

<http://www.city.miyakojima.lg.jp/gyosei/toukei/toukei-ichiran.html>

「琉球新報」ウェブ版

2014年3月13日 「砂川君，誇り胸に巣立つ 来間中が閉校 最後の卒業生」2016年3月2日アクセス。

<http://ryukyushimpo.jp/news/preentry-221271.html>